

2020年度 入学試験問題
(仙台・東京・東海・高松会場)

国 語

(6 0 分)

〔 注 意 〕

-
- ① 問題は㊦～㊨まであります。
 - ② 解答用紙はこの問題用紙の間にはさんであります。
 - ③ 解答用紙には受験番号、氏名を必ず記入すること。
 - ④ 各問題とも解答は解答用紙の所定のところへ記入すること。
 - ⑤ 各問題とも特に指定のない限り、句読点、記号なども一字に数えること。
-

西大和学園高等学校

問題は次のページから始まります。

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。なお出題の関係上本文を一部改めた部分がある。

四月一日の夕方四時ごろ、大学の研究室の電話が鳴った。かけてきたのは知人で、「元号、見ましたか」という。正直なところ、元号など自分にあまり関係のないものと思っていたので、とくに関心をもってはいなかった。

帰り道、キオスクで新元号「令和」の字を見ても、ピンとはこなかった。A、多くの日本人も同じ気持ちだっただろう。「日本らしさを命令する」というような、なんとなくカンリョウ的な、徳川体制的な変なものだ、という気がした。

電車の中で夕刊を読みはじめると、出典は『万葉集』だと書いてあって、驚いた。家に着くと、コメントが欲しいという依頼が新聞社からきていた。元号というものは、発表されればみないろいろな解釈をして、正確なものもあれば、勝手なものもあるのだろう。そういうものだと思って、調べる時間もないまま、記憶の中から、非常に素直な感想をコメントした。

「令和」の典拠は梅花の歌三十二首序だという。天平二年、大宰府で催された正月の宴に大伴旅人や山上憶良らが集ったとき、詠まれた歌の冒頭に置かれた漢文序だ（以下引用は、中西進『万葉集 全訳注原文付』全四巻別巻二、講談社文庫による）。

初春令月、氣淑風和、梅披三鏡前之粉^{（注）}一、蘭薰三珮後之香^一。

初春の令月にして、氣淑く風和^{きよめん やはら}き、梅は鏡前の粉を披^{きやうぜん こ}き、蘭は珮後の香を薰^{らん はいご かをら}す。

「令」の出典となった令月を、私の師である中西進は「好き月」と訳していた。ぼくの昔の英訳では、splendid monthつまり天気「すばらしい」、アイデアが「みごと」などというときに用いるsplendidを使っている。氣淑風和の「和」はsoftで、この場合は肌ざわりがきつくはないというほどの意味だ。いま改めて英訳するならこうなるだろう。

The time was the splendid month at the beginning of the year.

The air was clear, the wind was soft.

「令和」とは、ぼくがこうして言葉を組み合わせたとおりの意味だとすれば、「めでたいやわらかさ」とか「すばらしい弾力性」と

でもなる。

『万葉集』の時代は、日本語が初めて書かれた時代である。そのとき、梅花の宴に集った人びとの言語感覚の広さ、それと同時に、グローバルな二十一世紀の時代に、日本文化のひとつの特徴である softness つまり弾力性のすばらしさ——。そんな元号として、ほかは解釈した。

もつともそのあと、日本政府は海外に向けた説明で「ビューティフル・ハーモニー（美しい調和）」だと言い出した。元号とはそういうもので、X。

^①新元号について、自身にひきつけて感じたことがもうひとつある。漢文で書かれたこの序文は、次のように締めくくられている。

詩に落梅の篇を紀す。古と今とそれ何そ異ならむ。

宜しく園の梅を賦して聊かに短詠を成すべし。

「古」つまり中国の詩は、散つてゆく梅の花、落梅を昔からテーマにしてきた。ならば私たちも、いま落梅を書いてみようじゃないか。それも大和言葉で——。漢文の序はここで終わり、三十二首の日本語の短歌が始まるのだ。

ぼくが最近つかっている言葉でいえば、^②ここに表現されているものがバイリンガル・エキサイトメント、つまり多言語的なウヨウ感だ。「古今」を対比し、中国イコール「古」にならないながら、新たに日本語でやるうとしていることが「今」なのだ、という認識がここにある。

B これこそ、新元号の考案者が言葉の歴史への深い理解にもとづいてよくよく考え抜いた仕掛けだったのかもしれない。新聞や雑誌では、国書から採られた「令和」をナシヨナリズムにのつつたものと否定的に捉える見方がある一方、国書といえども漢文から採ったのだから反ナシヨナリズム的、つまり国際主義的なのだという見方もある。C、この漢文序がいおうとしていることは、中国人は中国語で書く、そして私たち日本人は日本語で書くということであって、そこにもうひとつ、否定の否定がある。

ここには、近代国家のどんなイデオロギーでも片付けられない、日本文学が初めて書かれた時の、表現者たちの感性、D 表現の真実そのものがある。その意味でやはりぼくには、この元号はなかなかいいものだと思えてくる。政治的理念よりも言語感覚が表れただけが選ばれ、新元号が生まれたということがなんと面白。

バイリンガル・エキサイトメントという言葉でぼくが伝えたいのは、梅花の宴に集った大伴旅人や山上憶良の頭の中に、ふたつの言

語が存在していたという現象だ。自分たちの日本語で新しい表現をつくってみようという。シヨウドウの前提に、中国語と日本語が同時に認識されているという状況があったのだろう。

そしてこの「Y」性は、彼ら以後千三百年の歴史を通じて、教育ある日本人はみなもっていたソヨウなのだ。子どもから大人まで、日本人にとって、漢文教育は当たり前だった。和文と漢文を使い分けることは、長らく日本語の当然の教養であった。

それは、日本の現代文学のひとつの課題として異なるかたちであらわれてきた。在日の作家にはじまり、西洋人として初めて日本語の小説を書いたべく自身。そして水村美苗や多和田葉子(注2)がいて、最近では温又柔や楊逸(注3)やヤンイーきた。こうしたエッキョウ的な作家たちの存在は、ごく新しい現象であると同時に、『万葉集』巻五を読むと、こうした「Y」性こそ、日本文学の出発点にすであつたということに気づかされる。

ひとりの人間にふたつの書き方、ふたつの表現の仕方が与えられたとき、ふたつの言語をどちらも使ってみたと思うのは、非常に自然なシヨウドウなのではないか。

大げさにいえば、令和という新元号は、人間のこうした根源的な表現欲というものを、日本文化のなかに再発見するきっかけとなつたわけだ。

(中西進編著『万葉集の詩性』所収 リービ英雄「万葉集エキサイトメント」による)

(注1) 梅花の歌三十二首

： 大宰府で開かれた「宴」において、梅花を題材に三十二首の短歌が詠まれた。

(注2) 水村美苗や多和田葉子

： いずれも日本人小説家。水村美苗(一九五一-)は、幼少の時に渡米し、アメリカの大学で教鞭をとる傍ら、日本語で小説を書く。多和田葉子(一九六〇-)は、ドイツに在住しながら、日本語とドイツ語で小説を書く。

(注3) 温又柔や楊逸、アーサー・ビナード

： いずれも外国に出自を持ちながら、日本語で創作を行う小説家。温又柔(一九八〇-

-)は、台湾生まれ。楊逸(一九六四-)は、中国生まれ。アーサー・ビナード(一九六七-)は、アメリカ生まれ。

問一 波線部 a ~ e のカタカナを漢字に直せ。楷書で丁寧を書くこと。

問二 空欄 A〔 〕 D〔 〕に当てはまる最も適切なことばを次の中から一つずつ選び、記号で答えよ。

ア・しかし イ・たとえば ウ・あるいは エ・そして オ・おそらく

問三 文中の〔 X 〕に当てはまる内容として、最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア・海外に発表するために解釈する必要があるのだ

イ・正しい解釈へと次々に更新されていくのだ

ウ・誰も解釈をコントロールすることはできないのだ

エ・個人よりも政府の解釈の方が影響力をもつのだ

オ・どの解釈も自分勝手に間違ったものであるのだ

問四 文中の〔 Y 〕に共通して入る語句を、本文から六字で抜き出して答えよ。

問五 傍線部①「新元号について、自身にひきつけて感じたことがもうひとつある」とあるが、筆者が「もうひとつ」のことを「感じ」ることができたのは、筆者がどのような人物であるからか。それを説明した次の文の〔 〕に当てはまる最も適当な部分を、本文から十九字で抜き出し、最初と最後の三字を答えよ。

筆者は〔 〕
(十九字) 人であるから。

問六 傍線部②「ここに表現されているもの」とあるが、どのようなものか。三十字以内で説明せよ。

問七 傍線部③「新元号の考案者」とあるが、「新元号の考案者」が「令和」のどのような点を評価して、元号に選んだと筆者は考えているか。その説明として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア・中国文学のテーマを日本語で表現しており、日本と中国の文学を折衷しようとする意識が表れている点。

イ・和文と漢文の両方を使うことに對して、歌人たちが抱いていたバイリンガルへの誇りが表れている点。

ウ・日本人・中国人がそれぞれ自らの母語で表現すべきという母語を大切にしようとする意識が表れている点。

エ・中国人は中国語で表現する一方で、自分たち日本人は日本語で表現しようという言語感覚が表れている点。

オ・ナショナリズムの意識だけでなく、同時に他国の文化も尊重しようという国際主義の意識が表れている点。

問八 傍線部④「令和という新元号は、人間のこうした根源的な表現欲というものを、日本文化のなかに再発見するきっかけとなつた」とあるが、どういうことか。八十字以内で説明せよ。

問題は次のページに続きます。

二

次の文章は、柳美里の小説の一節である。「私」の父と母は別々に暮らしているが、ある日突然、家族全員で映画に出演することになった。露天風呂でのシーンを撮影中、父は家族をやり直したいと言い出す。それに対し、母は強く否定する。次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

「そんな話するやつがあるか！これは映画なんだ。きみて女はいつもそうだ。ペラペラペラ余計なことをしゃべりまくってなにもかもぶち壊す」思わず立ちあがって怒りに身を震わせた父は、あわてて湯のなかに腰を屈めた。

「もうこうなったら映画もへったくれもないわよ、監督、こんなぬるい湯に浸かってたら風邪ひいちゃうわ、出るわよ、素美そのバスタオル貸しなさい、それにほら、それ！消しなさいよ！」ライトが消えると母は外に出た。岩に片足を乗せた父は滑って湯のなかに尻餅をつき、両手で空をつかもうとしたが、私も弟も妹も手を貸そうとはしなかった。父は自力で立ち上がり、私の顔を一瞥すると何もいわずに何度も掌で顔を拭った。

家族だけでなくスタッフもアイスボックスのなかからジュースやビールの缶をとり出し、つづけざまにシュウツという音をたてて蓋を開けた。

「駄がA」してる」父は煙草に火をつけた。

ビールを呑み終えた片山は右手で缶を握り潰そうとして失敗し、両手で缶を捻っていった。

「さあ、今日の最後のシーンを撮りましょう」

父はまだ残っている私のコーラのなかに煙草を落とした。撮影の準備が整いライトに照らし出されても、誰も口をひらこうとしない。弟も妹も先刻の話の意味を見つけないとして父と母の顔を交互に盗み見ている。見当はついていない、ただその事実を認めたくないだけなのだ。《旭球殿》の社長が何年も前から父を辞めさせたがっていることは耳にしていた。何が起ったとしても、私たち兄弟にとってはたいしたことではない。父の暴力、母の放埒さがもたらした恥辱にも、私たちは何とか堪えてきたのだ。卑屈なほど従順に受け入れたといってもいい。私も弟もしっかりと植えつけられた父と母への憎しみを外へ向けるしかなかったのだ。ただ他人と折り合うことができず、憎んだだけだ。両親を憎む罪に較べれば、安価な代償というべきだろう。しかし父が失業するとしたら、経済的な問題よりも父は《旭球殿》の総支配人、月八十万もの高給だということで辛うじて支えてきたプライドを喪うことになり、すべてのものと折り合いがつかなくなるだろう。

「良いところは良い、悪いところはお互い反省し改めるということ、もう一度やり直そう。きみがわたしを裏切って出て行ったこ

とは水に流す」

下手な役者が丸暗記した科白せりふを棒読みするよりもっとひどい。母は顔に流れてくる煙を避けながら小枝たきびで焚火をついている。照り返して、目、頬骨ほおほね、下顎したあごに切迫した思いが炙り出されているように見える。秒が刻まれるたびに増していく緊張に堪えられなくなったのか、妹が今までとは打って変わった弱々しい声で、

「ねえ、そうしようよ、ママ、もう一度みんなで暮らそうよ」哀願するような震えまで加わった。

弟はコーラを呑み干すと持参したテニスラケットで素振りをはじめ、「素美お姉ちゃんがいいならいいよ、ぼくは。すごいスイングでしょう」

① 今や弟だけがカメラを意識していた。しかしカメラは私に振られた。

「わたしは棲すめない」そういつて黙った。家族が一緒に暮らせば失ったものをとり戻せると信じている父が理解できなかった。父は煙草をくわえるとしだいに強くなってきた風に背を向けて火をつけた。

「林さんクビになったの」母は小枝を火にくべて、「だからみんなで使ってた保険証はもう使えないの。国民保険に加入するしかないのよ。あたしと一樹は昨日鎌倉で手づきしたから、素美は東京都の保険課に行つて相談してちょうだい。社会保険が失効してから十四日以内だから明日行つたつて遅いくらいよ。一樹もアルバイトして自分で稼ぎなさい。林さんは退職金も年金ももらえないんだから、今月から生活に困るのよ。今までみたいに林さんとこ行けば、お小遣いももらえるなんて思つたら、大間違い」母はこれまで聞いたことがない抑えた口調でいった。一緒に暮らしていたころは酩酊めいてしたような母の高いテンションにいつも翻弄ほんろうされ、低音で言葉を交わしたことなど無かった。蜘蛛くもの糸よりも細い雨があちこちに線を引いた。カメラマン以外の全員、思わず揺れる炎に目を落とした。

「パパどうするの、生活費とか家のローン」妹が掠かすれた声を出した。

弟はラケットを振っている。

「だからどうしようもないのよ、都筑つづきの家はとりあげられるの、林さんと羊子ちゃんが棲む家は無くなるのよ。羊子、あんた養つていける？ パパを？」

父は黙ったまま煙草の先を見詰めていたが、ふいに自分の老いを認めたような笑みを浮かべた。

「なんとかなる、パチンコ屋はこれからB開店するし、わたしは三十年のキャリアを持つているから引つ張りだこだ。どこだって高給で雇ってくれる」ゆつくりとしゃべりながらその可能性を考えているような口ぶりだった。

「そのキャリアが邪魔なのよ」と母は吐き棄て、「今の機種はほとんどがデジパチ（注4）、コンピューターで出玉を操作できるから釘くぎの調

整なんて素人で充分じゃない。時代遅れ、用なしのお払い箱のくせになに寝惚けたこといつてんのよ。林さんはプライドが高いから、ガードマンもタクシーの運転手もできない。月々のローンはいくらなのよ、今売るのは不利、売れないの、あのあたりの地価は一番高いときに較べると半分以下なんだから、足もとを見られて叩かれるの、なんとかして売らなくても済む方法を考えないと」

② 「パチンコのゴト師(注)になれば月に百万、三百万は楽に稼げる」

燃えている一点の火を口の上で支えている父の右手が震え、俄(にわか)に雨は激しくなった。カメラにはいつのまにかビニールが被(か)せられている。

「寝言はたくさん。林さん、いい、あたしはプロなの、不動産のプロよ、いい、だからなんにもいわずにあたしのいうことを聞くの。正式に離婚した上で、都筑区の家の名義、あたしに変更して。そうしないと、クビと知ったローン会社や借金とりが明日にでもやってきて身ぐるみ剥(は)がされるわよ」

「なかで話そう」父は濡れた前髪を掻(か)きあげて支柱が斜めに傾(か)いで今にも倒れそうなテントのなかに入って行った。

「一樹、手伝え」父は雨のなかに飛び出し、ロープを引っ張り杭(くい)を打ち直そうとしたが、テントは□C□をするように大きく揺れるだけだった。

③ 母が鍋を焚火(たきび)にぶちまけると濛々(もうもう)と煙があがった。

「な、なにするんですか、お母さん」片山が悲鳴を上げた。

「林さんは自分のことしか考えていない！家族に対する愛情なんて蚤の糞(のみかん)ほども持っていないのよ！そんなこととつくの昔にわかってたけど、一度くらいあたしのいうこと聞いてくれたっていいじゃない！プロのいうことに耳を貸すべきよ。林さんが救われる道はひとつ、あたしの名義にしない！」

「宿に泊まろう」父は駆け足で山路(やまみち)をのぼって行った。

私たちはロケバスに乗り込んで濡れた髪と顔をタオルで拭(ふ)いた。撮影のライトが消えてしまうとキャンプ場は闇に沈み、山全体を揺さぶるような激しい川の音がする。

しばらくしてフロント硝子(がらす)の向こうに父のシルエットが見えた。

「満室だった」全身から雨を滴らせている。

「今日は引きあげましょう。松本市内のビジネスホテル、携帯で予約してくれる？明日晴れたら山登りのシーンを撮って、雨だったらやむまで撮休(とく)ってことにしよう。ま、ホテルで詰めるけど」片山が助監督に指示を出した。

「テントに泊まる！」父は雨のなかに身を翻し、テントの支柱を立て直そうとするがどうやっても真っ直ぐにはならない。

「馬鹿野郎、カメラまわせよ！」我に返って、片山はカメラマンではなく助監督を怒鳴りつけ、「ライトだよ、ライト！」そう叫んで雨のなかに躍り出た。カメラマンは「もう一枚シート出せ！早くフィルム換えろっていつてんだろ！」と被っていた野球帽で思い切り助手をひっぱたき、「ライトはいらねえよ、それより車の場所変えろよ！」とあわてて機材の準備をしている照明マンを怒鳴りつけた。父の車に乗り込んだ照明マンはヘッドライトをテントに向けようとして車を動かし、ロケバスの運転手は出入口が父に相対するよう^④にハンドルを切った。カメラマンは出入口から身を乗り出してハンディカメラをまわしはじめた。暖房で曇った窓硝子を^{てのひら}掌で擦る^{こす}と、頭を前方に傾けて両手を握り合わせている父の姿が見えた。雨の音に聴き入っているようにも祈っているようにも見える。

母は窓から顔を背け、私からも目を逸らし、

「素美、自分の保険証持ったら、家から抜けられたってことよ」

「画面に声だけがかぶること、なんていうんですか」私は雨の音を録音している男に訊いた。

^⑤「シンクロかな、ちがうか」録音マンはナグラのチャンネルをいじりながらいった。

雨に打たれた父の姿に母の声がかぶるのを待ったが、母は黙ったままだった。妹は助監督からビニール傘を受けとって外に出ると、父を抱え起こして連れ戻ってきた。項^{うなだ}垂れた父はロケバスに足を踏み入れ、渡されたバスタオルで涙^{はな}をかんていつまでも顔をごしごし擦っていた。突然、弟は肩の上に頭が座り切っていない赤ん坊のように首をDさせながらけたましい笑い声をあげた。

(柳 美里『家族シネマ』による)

(注1) 先刻の話 …… 父と親密な関係である武井から「父が失踪するかもしれない」と母に電話があった。

(注2) 旭球殿 …… 父が勤めているパチンコ店。

(注3) 都筑 …… 神奈川県横浜市北部の区名。

(注4) デジパチ …… パチンコ台のジャンルのひとつ。

(注5) ゴト師 …… 不正な手段でパチンコ、パチスロの玉やメダルを出す者。

(注6) シンクロ …… 映画・テレビなどで、撮影と録音を同時に録音すること。または、撮影と録音とを別々に収録し、あとで一本のフィルムに面画と音声^⑥が合うようにまとめること。

問一 二重傍線部 a 「一瞥する」・ b 「放埒さ」の本文中での意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

a 「一瞥する」

ア・じっくりと見つめること

イ・ひとときを見下すこと

ウ・まじまじと見比べること

エ・ざっと見通すこと

オ・ほんの少し見やること

b 「放埒さ」

ア・人の心を引きつけること

イ・勝手気ままに振る舞うこと

ウ・動作が大げさで荒々しいこと

エ・道徳や規律に厳しいこと

オ・物事を思い通りにできないこと

問二 A 〽 D に当てはまる最も適当なことを次の中から一つずつ選び、記号で答えよ。

ア・ぐにやぐにや

イ・ほかほか

ウ・どんどん

エ・ぶよぶよ

オ・いやいや

問三 傍線部①「わたしは棲めない」とあるが、なぜ「私」はそのようなことを言ったのか。その理由を六十字以内で説明せよ。

問四 傍線部②「燃えている一点の火を口の上で支えている父の右手が震え」とあるが、この時の父の説明として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア・父としての威厳を懸命に保っていたが、撮影中のスタッフや愛する子どもたちの前で解雇され、恥をかいてしまい落胆している。
イ・新しい職場を簡単に見つけられる自信はあるが、母の意見に反抗すると面倒になるので、落ち込んでいるふりをしている。
ウ・母に対して強気の姿勢を張ってしまったが、自分の年齢を考えると新しい職がすぐに見つかる確信はなく、不安になっている。
エ・今まで仕事で様々な苦勞をしてきたが、これからはパチンコで楽に稼げるので、生活費や家のローンを返せると安堵している。
オ・パチンコ業界で一儲けしようとたくらんでいたが、現実的ではないと不動産に詳しい母に全否定され、自信を喪失している。

問五 傍線部③「母が鍋を焚火にぶちまける」とあるが、この時の母の気持ちとして、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア・生活費や家のローンなど子供たちの心配をしてほしかったのに、パチンコの話だけに関心があり配慮のない父にいらだつ気持ち。
イ・解雇されてしまった父の今後が気がかりだったので、様々な助言をしたが、自分のことしか考えられない父にいらだつ気持ち。
ウ・まともに自分の言葉を受け止めない父の態度から、自分が愛されていないことを感じ取り、理解が乏しい父にいらだつ気持ち。
エ・不動産のプロである自分の確かな意見を伝えたにもかかわらず、感謝の言葉を言わないうえに、文句を言う父にいらだつ気持ち。
オ・総支配人のプライドをいまだに捨てきれず、三十年のキャリアを自慢し、家族を見下したような態度をする父にいらだつ気持ち。

問六 傍線部④「頭を前方に傾けて両手を握り合わせている」とあるが、この時の父はどのような気持ちか。六十字以内で説明せよ。

問七 本文の「私」に関する内容に当てはまるものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。
ア・「私」は、幼い頃家族に愛情を注がなかった父を恨んでいたが、親としてのふがいなさを恥じる気持ちがあつたことをはじめて知り、父を遠ざけ続けてきた過去を思い返し反省した。

イ・「私」は、撮影中のカメラの前で台本通り陽気にふるまうことで、父と母に裏切られた悲しみを取り繕おうとする妹に対して、励ましてやることができず姉としての自分の無力さを感じた。

ウ・「私」は、カメラを意識しながら演技を続けていたのは弟だけで、弟以外の家族は撮影が進むごとに、撮影中であることを忘れていき感情をお互いにつけあっているだけだと感じた。

エ・「私」は、撮影中にもかかわらず夫婦喧嘩を始めた父と母の機嫌を損ねないように気を配りながら、雨の中でもキャンプ場で撮影が続けてくれるスタッフに対して申し訳なさを感じた。

オ・「私」は、子供たちの気持ちを顧みず自分の都合だけで行動する母が、必死にテントを立て直そうとする父の姿を見たことで、再び家族で暮らそうと言いつくすのではないかと心配した。

問題は次のページに続きます。

三

次の文章は、息子の活躍がうれしくて仕方ない作者が、幸せな日々を回想して書いたものである。次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

子は二人ぞ。^(注1) 律師、^(注2) 阿闍梨にて、心ばへよりはじめ、めでたくたくひあらじとおぼえてものし給ふ。朝夕に嬉しきことにて、年月あつかはれ過ぐして侍るに、阿闍梨、^① 世の中にいたく仕へ、修法などもこかしこひまなくしつ、苦しき折々は、ともすれば、「心のどかに^② 行ひなどもして侍らばや」と言ひわたり給ふに、世の中めでたく、世を久しく保たせ給ひつる^(注3) 関白殿、年いたうつもらせ給ひて、宇治殿とて、めでたき堂、極楽などのあらむやうにして籠りあさせ給ひて、行幸せさせ給ひ、めでたきことどもしてご覧じ、おもしろく聞こゆることかぎりなし。

さて、しばしありて、宇治殿^③ なやませ給ふに、老いさせ給ふにこそはと人々思ひたるに、^(注4) 帝、例ならずおはしますと聞ゆ。^④ 阿闍梨は宇治殿へ参りなどし給ふに、また内裏の御修法とて、^(注5) 道をなかにて歩き、おほかた世の暇なく、さわがしくて過ぐるほどに、いとほしう苦しげに、そこらの御修法、仁和寺の宮と申すも参らせ給へるに、宇治殿、^⑤ 「よき人あまた候ひ給ふほどに、しばし」と召せば、参り給ひぬる。

日ごろのほどに、帝、いたくなやませ給ひて騒ぐと聞くほどに、「失せさせ給ひぬ」と人々言ふ。^⑥ 「夢のやうにも侍る世かな。限りなき御身にも世のはかなさはかくこそは」とて、「年ごろよりもなつかしう召しつかはせ給へることの、思ひ出で侍るもいとこそあれに」と、ともすれば、申し出でつつ過ぐし給ふ。

(『成尋阿闍梨母集』による)

(注1) 律師

： 作者の息子。成尊のこと。成尋の兄。

(注2) 阿闍梨

： 作者の息子。成尋のこと。成尊の弟。

(注3) 関白殿

： 藤原頼道のこと。宇治殿ともいわれる。

(注4) 帝、例ならずおはしますと聞ゆ

： 帝も病気でいらつしやると人々がうわさする

(注5) 道をなかにて歩き

： 御所と宇治殿との間を行ったり来たりして

問一 二重傍線部「あらむやうにして籠りあさせ給ひて」を、現代仮名遣いに改めよ。漢字はそのままでよい。

問二 傍線部①「世の中にいたく仕へ、修法などもこかしこひまなくしつ、苦しき折々」とあるが、どういう状況を指すか。最も

適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア・自分の生活を良くしようとしても加持祈祷では良くならず成尋が無力感を感じている状況。
イ・自分の生活を良くしようとしても加持祈祷では良くならず成尋が他の策を考えている状況。
ウ・世のために暇なく加持祈祷をする成尋を見て、作者が疲弊してこの世をうらんでいる状況。
エ・世のために成尋がずっと加持祈祷などを人々にさせ続けるので、人々が疲弊している状況。
オ・世のために尽力し、ずっと加持祈祷などをしているので、成尋が疲れてしまっている状況。

問三 傍線部②「行ひなどとして侍らばや」、傍線部③「なやませ給ふ」とあるが、それらの語の本文中の意味として最も適当なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、記号で答えよ。ちなみに傍線部②「行ひなどとして侍らばや」は、成尋阿闍梨の言葉である。

②「行ひなどとして侍らばや」

ア・自分のために仏道修行などしたいものです
イ・自分のためにも仏道修行などをするべきです
ウ・人々のためには仏道修行などをいたしません
エ・人々のために仏道修行などしたいものです
オ・人々のために仏道修行などしてほしいです

③「なやませ給ふ」

ア・困惑しなされた
イ・困惑させなされた
ウ・混乱におちいりなされた
エ・病気におなりになった
オ・病気にさせなされた

問四 傍線部④「阿闍梨は宇治殿へ参りなどし給ふ」とあるが、Ⅰ何をしに、Ⅱ何のために成尋は頼道の所へ参上するのか。Ⅰ、Ⅱそれぞれに答えよ。

問五 傍線部⑤「よき人あまた候ひ給ふほどに、しばし」の解釈として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア・すぐれた僧侶がたくさん帝のもとに参内なさっているのだから、あなたはしばらくの間、私の所においてください。
イ・すぐれた僧侶がたくさん帝のもとに参内なさっているのだから、あなたはしばらく、お母さんに付き添ってあげてください。
ウ・すぐれた僧侶がたくさん私のもとに伺候なさっているのだから、あなたはしばらくの間、帝の所においてになってください。
エ・すぐれた僧侶がたくさん私のもとに伺候なさっているのだから、あなたはしばらく、お母さんに付き添ってあげてください。
オ・すぐれた僧侶がたくさんあなたのもとにはいらっしやるのだから、その一人をしばらくの間だけ私の所によこしてください。
カ・すぐれた僧侶がたくさんあなたのもとにはいらっしやるのだから、その一人をしばらくの間だけ帝の所に遣わせてください。
問六 傍線部⑥「夢のやうにも侍る世かな」とあるが、誰がどうなったことで、どのように思っているのか。成尋阿闍梨の気持ちを四十字以内で説明せよ。

問七 本文の内容として、合致しないものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア・他に比べるものがないほど氣立てなどもすばらしいと二人の子が称賛されるので作者はともうれしく思っている。
イ・関白頼道は、長年の間すばらしく世を治め保ちなさるうちに、たいそうお年を召されてしまった。
ウ・仁和寺の宮と申す方も加持祈禱に参加するなど、帝の病氣治癒に向けた儀式はとても盛大に行われた。
エ・長年帝の近くでお仕えしてきたので、病氣になった帝のことを思い出すと作者はなんとなく悲しい氣持ちになった。
オ・息子成尋の、阿闍梨としての力が帝にも及んだならば帝はこのようなことにはならなかっただろうと作者は思っている。

